

丸山眞男とその時代

福田 歓一

近代日本における巨大な知識人であり、学者であると同時に思想家であるという稀有の例であった丸山眞男が、いかなる時代に成長し時代との格闘の中で学問と思想を築いて行ったかを、その形成の背景と関連させながら述べてみたい。

◇

丸山はその父・幹治の關係で、関心領域の広さでは福沢諭吉以来の大ジャーナリスト、長谷川如是閑に小さい頃から可愛がられ、彼を「第一の師」とするいわば大正デモクラシーの兒であった。

一九一八年、第一次世界大戦終結後のヨーロッパでは文明の自己破壊という深刻な危機意識から平和主義、民主主義、社会改造が叫ばれたが、実質上戦争の局外にあった日本は、好景氣を謳歌し、当時の社会認識にはオペティミズムが溢れていた。しかしそれは、男子普通選挙権の実現との抱き合わせによって行われた治安維持法の改正といった反面を持っており、関東大震災に続く世界大恐慌によって決定的な

崩壊を迎える。一九三一年丸山が第一高等学校に入学した年に陸軍が満州事変を起こし、翌年犬養首相暗殺により政党内閣が終わりを告げている。次いで三三年にはドイツにナチス政権が成立、一方、日本は国際連盟を脱退した。この年、丸山は如是閑の講演を聴きに行つて思想犯の容疑者として逮捕、拘留され、時代の変化、国体という神話の意味を身を以て知らされたのである。

明治以来、日本は学問においても分業によって能率よく先進国の水準に到達することを目指して来たが、その反面、人間の営みを統一的に理解するという視野を失いがちであった。

その中であつて、一高時代の丸山は、統一的な人間の営みの理解を提示するものとしてマルクス主義の大きな魅力を味わいつつも新カント派哲学などによって、マルクス主義への批判の目も養つた。学問を学ぶのみならず文芸、演劇、音楽、映画など知性と感性にわたる人間の営み全てに大きな関心を持った。東京帝国大学法学部政治学科進学

後は、専門の学問の他にヘーゲル、マルクス、マックス・ウェーバー、カール・シュミット、カール・マンハイム等の他、法律、特に憲法についての勉強に励んでいる。

一九三五年、貴族院での質問に端を発し、天皇機関説の排撃に始まった国体明徴運動は、当時の思想界に異議を許さない力を持つようになるが、丸山にとっても国体は破ることのできない思考の壁として感じとられたのである。

一九三六年二・二六事件が起こった年に丸山は政治学史の講義で「第二の師」南原繁教授との運命的な出会いにより、やがて職業として学問の道を選ぶこととなる。教授の強い薦めで日本政治思想史を専攻した丸山は「近世儒教の発展における徂徠学の特質並にその国学との関連」と題する論文を発表して、新講座・東洋政治思想史の担当者となり、次いで、一九四一年から二年にかけて「近世日本政治思想における『自然』と『作為』」という論文を発表した。これら論文は、歴史的な秩序を人間の作為とする思考、即ち政治の独立性の認識を明確にする意味を持ち、それまでの経学の伝統から全く自由な専門知識の領域の確立を果たした。続いて「国民主義理論の形成」では、国家と国民の内面的結合という問題に突き進んでいる。

この間、一九三七年には日本は中国との全面戦争に突入し、四〇年には三国同盟を結び、四一年ついに米英と開戦して、第二次世界大戦に加わった。この時期、大学教授の検挙、辞任が相次いだ。国体の壁、時代の中での孤立と不安――、南原教授を大きな支えとして丸山は批

判の精神を一步も緩めずに学問的な仕事を続けていった。

帝国陸軍から召集を受け一兵卒としてヒロシマを生き延びた丸山は、一時沈潜して、国体についての自らの立場を問い、一九四六年、「国体の壁」を破って精神構造の深みに立ち入り、今後の課題を明示した「超国家主義の論理と心理」を発表し、国民に衝撃的な影響を与えることとなる。

その後、アンシャン・レジームの正体を明らかにする活動は、一九四八年には「日本ファシズムの思想と運動」となり、一九四九年には東京裁判の被告を材料に「軍国支配者の精神形態」を発表している。資料の無い時代に、痛切な体験と切実な関心と観察から生み出された知性の力業ともいえる仕事であった。

その間にも一九四七年「科学としての政治学」を著し、次の世代に大きな影響を与える一方、急激な発達を遂げたアメリカ政治学を摂取し五二年には『政治の世界』を発表した。

以上のように丸山の活動は本来の専攻の他に、政治学全般、さらにはジャーナリズムに及ぶ言論活動にわたり、丸山自身、それを「本店」と「夜店」という比喻で表現している。

しかし、一九五一年の肺結核の入院・手術以後は、「夜店」を整理して若い研究者に任せ、「本店」の日本思想史に専心、一九五七年には「日本の思想」において国体の問題を最も周到に解明したのをはじめ、文化接触さらには日本の思想の特質を問うて、その原型にさかのぼる仕事を残している。しかも一方で、平和問題談話会、憲法問題研究会、

国際問題談話会等への参加、六〇年安保のよりの積極的な活動に余人を以て代えがたい大きな役割を果たし、亡くなるわずか四か月前に「戦後補償の速やかな実行を政府に要望する」声明にまで参加し、最後まで社会的発言を続けている。

丸山の時代との対決の特色は、目の前の変化ではなく、過去のレジームのトータルな構造を認識し、その惰性の克服を目指したところにある。非常に尺度が大きく視野が広く、そして視角が構造化をもつところにあった。

◇

丸山の批判精神は、日本の政治学の巨大な遺産である。戦後日本の閉塞が論じられ、バブル以後その歩みに混迷がつづいている現在、この批判精神を受け継ぎ、次の時代に生かすことができるかどうか、ことに社会過程を自覚的に自然過程と区別して、主体的な責任意識を生み出せるかどうかは、二十一世紀に新しい展望を開く上での大きな分かれ目となるだろう。若い人達が丸山眞男の残した仕事からその批判精神を学んでほしいと切望する。

(講演要約 五月三十一日 於大講堂 約五百名参加)

● 講師プロフィール ●

政治学史専攻。日本学士院会員、東京大学名誉教授。学生として、後輩の研究者として、また年少の同僚として、丸山眞男とは長い交流をもち、また共通の恩師・南原繁の業績を集成公刊するために終始協力した。

〔『東京女子大学学報』五五〇号、二〇〇〇年七月号所収。なお本講演を元にした論稿が、岩波ブックレット『丸山眞男とその時代』として、二〇〇〇年十一月に出版されている〕

